

武藏野日曜集会

聖意体現（二）

——ヨハネ伝第6章36～53節——

小池辰雄

1994年10月16日

聖意体現 キリストを食べる 永遠の現在 終の日に甦えらす 絶対次元の中に入る 聖靈に
圧倒されて 全身で受けとれ 『レ・ミゼラブル』

【ヨハネ6・36～53】

³⁵イエス言い給う『われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。³⁶然れど汝らは我を見てなお信ぜず、我さきに之を告げたり。³⁷父の我に賜うものは皆われに来らん、我にきたる者は、我これを退けず。³⁸夫わが天より降りしは我が意³⁹をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。³⁹我を遣し給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして終の日に甦えらする是なり。⁴⁰わが父の御意は、すべて子を見て信する者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし』

⁴¹ここにユダヤ人ら、イエスの『われは天より降りしパンなり』と言い給いしにより、⁴²呟^{つぶや}きて言う『これはヨセフの子イエスならずや、我等はその父母を知る、何ぞ今「われは天より降れり」と言うか』⁴³イエス答えて言い給う『なんじら呟き合うな、⁴⁴我を遣しし父ひき給わば、誰も我に来ること能わず、我これを終の日に甦えらすべし。⁴⁵預言者たちの書に「彼らみな神に教えられん」と録されたり。すべて父より聴きて学びし者は我にきたる。これは父を見し者ありとあらず、ただ神よりの者のみ父を見たり。⁴⁷誠に誠に、なんじらに告ぐ、信する者は永遠の生命をもつ。⁴⁸我は生命のパンなり。⁴⁹汝らの先祖は荒野にてマナを食いしが死にたり。⁵⁰天より降るパンは、食う者をして死ぬる事なからしむるなり。⁵¹我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与える』

⁵²ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』⁵³イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わば、その血を飲まずば、汝らに生命なし。



● 聖意体現

今日は『聖意体現』と題して、ヨハネ伝6章36節からお話をします。35節に、

³⁵ イエス言い給う『われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。

とある。こういうところに「なからん」なんていう蓋然性の気持で訳してあるのは、私は感心しない。「渴く」となし」でいい。

「パンをください」

と言つたら、イエスが言われるのに、

「我は生命のパンである」

と。皆は何かパンでも本当にもらうのかと思つたら、

「私が生命のパンだ

と仰つた。

「キリストを信ずる」

という言葉が躊躇になる。むしろ、キリストを食べなければダメだ。「食べる」というのは、何かを食べれば、普通のものはそれがお腹の足しになるわけだ。栄養になる。そのように靈的に食べなくてはいけん、キリストの生命にあずからなくては。靈的に食べるためには祈入、祈り入ることです。祈つてキリストの中に自分を入れなければダメなんです。

「祈る」というと、何かお願いかと思うけれども、お願いではない。自分自身をキリストの中に入れる。キリストの靈的な生命にあずかる。キリストと一つになる。一如ということ。祈ることはお願いではなく、キリストの中に入ることです。祈り入る、そうして、キリストと一つになると、個々の問題はどこかへ消えてしまう。

個々の問題は、今度はキリストと一つになつて祈ると、そこで本当に聞かれている。いつ聞かれるかは知りませんよ。しかし、聞かれているんです。それが実現するのは、直ぐだか、あるいは何日か後か、何年あとか知りません。とにかく、御名にあつて——「御名にあつて」と言うときには「キリストの中で」ということ——祈れば、その祈りは我欲がないから、それが御意を求めているわけです。聖意を求めている祈りは必ず成つていく。その時の聖意が分からなくても、一向差し支えない。

「御意を成らせたまえ」

というのは、そういうことです。

「どうぞ、私において聖意が体現するようにしてください」

ということ。自分でもつて努力して体現するのではない。キリストの御意は、神・キリストの力で体現させられる、必ず成る。分量は知らんですよ、質的には必ず成る。だから、

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

とキリストが言つたのは、そのことです。祈り入れば、それは根源的に聞かれている。直



ぐだか、まだ何日あとだかは知らん。とにかく、聞かれている。聞かれ方は、自分の願いよりももっと凄い聞かれ方になる。

「さつぱり自分の願いが聞かれていません」

なんて思つたら、そうではない。その願い以上のことが聞かれている。それが「聖意体現」ということです。

●キリストを食べる

私たちは毎朝、パンをいただいていますけれども、キリストを食べなくてはいかん。

「我は生命のパンである。我にきたる者は飢えない。我を受けとる者はいつもでも渴くことがない」

と。こういうところに「信ずる」なんていう言葉があるのが躊躇になる。私は「信ずる」という言葉は嫌いだ。「受けとる」でいい。「私を受けとる者は」ということです。体受、身体からだで受けとる。祈入する。そうすると力がくる。生命がくるし、力が来るし、楽しいし、楽になる。あなた方、そういう祈りをやつてているかね。疲れを知らなくなる。眠くはなるけれども。

「眠る」といえば、私は夢の中で素晴らしい夢を見るね、ほとんど毎晩だ。何でこんなに素晴らしい夢を見るのかと思っている。夢を見てながら、夢と思わない。思いがけない。1921年に私の長兄小池政美は天界に往つてしまつたけれども、そんなのと現実に会うような夢も見る。非常に楽しい。何か不思議でしようがない。こうやつて目覚めている時よりか、夢の中の現実の方がもつと現実なんだ。

「夢の世界は、これは夢ではなかつた、これは本当の現だつた。目が開いている時が夢で、現実が夢で、眠つている時の夢が本当の現実だ」と思つくらいです。

90歳にもなると、

「さて、もうあと地上は何年だろうか」

なんて普通は思うかもしれないが、私は思わない。終りなき生命、永遠の生命ですから。私が地上を去つても、

「小池先生は死んだ」

なんて絶対に言わないでください。

「向こう側に往きました。往生しました。向こう側に旅立ちました」

と言つてくれ。私は死という言葉は嫌いだ。私は死にません。キリストを受けとつている者は死はない。だから、私が向こう側に往つた時には、

「万歳！」

と言つてくれ。湿っぽいような葬式なんか要らない。みなで楽しい集会をしてください。



そういう烈々たる世界です。

「私は生命のパンである。私に来る者は飢えず、私を受けとる者はいつまでも渴かない」

という。飢えず渴かない。こういうことをピシャリと言えるひとだから、イエスというひとは大変なひとだ。だから、頭で読んだら、みな分からぬ。聖書研究会なんてものはダメなんだ。聖書身読会がいい。研究なんかする必要はひとつもない。『聖書之研究』なんて、内村鑑三があんな雑誌を書くものだから、「研究、研究」と言つてはいる。日蓮の方が偉いよ、

「法華經を身讀せよ」

と言つた。「研究せよ」なんて言いやしない。

●永遠の現在

「私は生命のパンなり。我にきたる者は飢えず、渴かず」

これは「渴くことなからん」ではない。

「渴かない、飢えない」

という、全部、現在直説法の言葉です。そういう言葉でなかつたら、直説法にしてしまえばいい。聖書以上の読み方をしなければダメなんだ、聖書をギリシャ語から訳すときに未來形だと未来のような形にするから。未来だつて過去だつて全部、現在に、現実になる。過去を救い上げる。未来を現在に招き来たらせる。そういう現実が永遠の現実、永遠の現在なんです。過ぎ行かない。すべてのものは過ぎ行くけれども、こういう現在性は過ぎ行かない現在です。常に新たなんです。私の魂はそういう現実でないと承知しない。あなた方はどうだね。

「でも、聖書にはこうあります」

なんて、「聖書にこうある」ではない。聖書以上の世界を、聖書のもう一つ奥をつかむ。キリストが驚いてくださる。それでいいんだ。

「こんな信仰はイスラエルにない」

と聖書に書いてある。我々もそういうイスラエルにない選びの民なんです。我々は選ばれた者ですよ、選民なんだ。ユダヤ人が選民ではない。キリストを本当に受けとつてている者が本当の選民です。あなた方一人ひとりが選民です。選ばれた者は人を救うだけの使命がある。人を救いあげる、人を本当の世界に入れてやる使命がある。入れざるを得ない。入らなければ、入らないやつが悪い。こつちが悪いのではない。受けとらない方が悪い。

「こんな素晴らしい世界をあなたは受けとらないのですか。もつたない話ですよ、永遠の生命がなくていいんですか」

ということです。

³⁶然れど汝らは我を見てなお信ぜず、我さきに之を告げたり。³⁷父の我に賜



うものは皆われに来らん、我にきたる者は、我これを退けず。

「退けず」というのは「棄てない」というもつと強い言葉です。

38夫わが天より降りしは我が意をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。

これは非常に力強い言葉ですね。「天より降りしは」なんて言つたものだから、ユダヤ人が「なんだ、おかしいな。あれはナザレのイエスではないか」なんて後でつぶやいている。

●終の日に甦えらす

52ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』

「肉を食べさせるなんて、どうやってやるのか、死んでしまうではないか」なんて、そういう馬鹿げたことを52節以下で言つてはいる。全然分かっていない。キリストは説明しませんから、宣言しているだけです。

「聴く耳ある者は聴くべし。受けとる心ある者は受けとるべし」と、それだけの話です。解釈している世界ではない。受けとる世界です。

39我を遣し給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして終の日に甦えらする是なり。

と。凄いね。世の終りに甦えらせる。御意を体現しないではいられないというんだ。「終の日」とは、イエスやキリストの弟子たちは終末の日は近いことを随分、意識している。もう世の終りは近いことを意識しておられた。一千年たつてもまだ来ないけれども。しかし、我々はいつでも終末に直面しているという現実でなければダメです。今晚でも明日でもいい。世界はひつくり返つて新天新地に行つてしまふぞと。

聖書の訳がまだつこかつたら、なにも原文なんか読まなくたつていいから、そのキリストの心を、神さまの心を表現するような創造的な訳を自分で作つたらいいですよ、そういう自分の聖書を。

「私はギリシャ語もヘブライ語も知りませんけれども、自分の聖書を作りました」と。ああ、結構です。聖霊の導きでそれができるよ。それくらいの意気込みでやつてくださいよね。

「わが父の御意は、すべて子を見て受けとる者の永遠の生命を得しむる是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし」

と。キリストは神さまの栄光体だからね。

41ここにユダヤ人ら、イエスの『われは天より降りし。パンなり』と言い給いしにより、42呟きて言う『これはヨセフの子イエスならずや、我等はその父



母を知る、何ぞ今「われは天より降れり」と言うか』
と、バカなことを言つてゐるんだ。

⁴³イエス答えて言い給う『なんじら啖き合はな、⁴⁴我を遣しし父ひき給わば、誰も我に来ること能わず、我これを終の日に甦えらすべし。⁴⁵預言者たちの書に「彼らみな神に教えられん」と録されたり。すべて父より聴きて学びし者は我にきたる。⁴⁶これは父を見し者ありとにあらず、ただ神よりの者のみ父を見たり。

「ただ神よりの者のみ父を見たり」とはキリスト自身のことだ。「神さまからの者」はキリストだから。

「未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。」
(ヨハネ1・18)

とある。靈的な神さまをキリストは「父」と言つてゐる。人間の肉親の関係で「父」といふのは一番拋り所の存在だからね。お父さんのいない人は、お母さんだつていいですよ。私なんかは現実からいうと母だ。私にとつて母小池光子は一切でした。父は私の数え歳五つの時に逝つてしまつたから、私はほとんど父を知らない。私の母の恩は海よりも深く山よりも高いと言つてもいいくらいです。

●絶対次元の中に入る

キリストの言葉は、棄身^{すてみ}で自分をキリストの中へ入れないことに、本当は受けとれない。それと対立してゐたのでは。その中に入つてしまわなければ。対立してゐるうちはダメです、その中に入つてしまわないと。

⁴⁷誠に誠に、なんじらに告ぐ、信する者は永遠の生命をもつ。⁴⁸私は生命のパンなり。⁴⁹汝らの先祖は荒野にてマナを食いしが死にたり。⁵⁰天より降るパンは、食う者をして死ぬ事なからしむるなり。⁵¹私は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与える

⁵²ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己^{おの}が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』⁵³イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。なんて、キリストは凄いことを言うからね。

「私の中に入つて、私の生命にあらずからなければ、生命はない」と。まあ、大変なひとだね、ケタが違う。次元が違うんだ、絶対次元の世界だから。だから、絶対次元の中に入らなければ。「自分の信仰」なんて、そんなものは棄てなさい。

「何もありません。私はただキリストの中に入るだけです」



と。それでいい。

「私の信仰はまだ薄いから…」

なんて、自分の信仰なんかを顧みる必要はない。

「信なき我をあわれみたまえ」

という言葉がある。あれでいいんだ。

「あなたの 中に入ります」

と言う。

「私はお前をつかまえて いるぞ。どこへ行つたつて逃げられないぞ」

と、そういうキリストの追跡だから。私は今、異言が出そうなんです、抑えて いますけれども。今、本当は普通の言葉で話したくない。

教会の牧師さんや何かが、もつともらしいことをしゃべつたつて しようがない。武藏野のあなた方はきいわいだよ、私みたいな言葉にもならないような言葉を、

「これが本当の福音の現実だ」

ということを聞いて いるのは。

「よし、キリストを食べるぞ」

と。みなこれは、そういう表現で言うことは、素晴らしい靈的な現実のことです。祈り入つて全身が熱くなる。そうしたら、キリストを食べていることになる。そういう祈りを——沈黙の祈りでいい、沈黙の雄叫び——沈黙の雄叫びの祈りをする。あるいは、沈黙の讃美歌だ。御名を讃える。好きな讃美歌をよく歌いなさいよ、声を出さなくててもいいから。私は自分で讃美歌を作らざるを得なかつた。あまり好きな讃美歌が少ないものだから。⁵³ イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、

その血を飲まずば、汝らに生命なし。
だつてき。凄いね、キリストの言葉は。

「私を食べ、私を飲まなければ、生命はないぞ」

と。こういう言葉をいい加減に読んでいたらダメなんです。

「どういう意味でしようか？」

ではないよ。意味ではないんだ、現実だから。……私は今、異言が出そうで困つている。

●聖靈に圧倒されて

今日は「パン」という言葉が大分出でているけれども、「御意を行ふ」という38節が大事です。

³⁸夫わが天より降りしは我が意^{いのい}をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意^{みこころ}をなさん為なり。

だから、

「キリストは無者である」



と言つてゐる。自分は何者でもない。そして、神一切である。

「我は何者でもない」

と仰つてゐる。なにさま、キリストの言葉は凄い。全身でキリストの言葉の中に入つていかなければね。註解書も何も要らん。本当は説明なんかできることではないんだから。

⁴⁷誠に誠に、なんじらに告ぐ、信する者は永遠の生命をもつ。

「信する」という言葉は私は嫌いだ。「受けとる者は」ということです。「本ものとする者は」でもいい。どうも、「信する」とか「信仰」という言葉が躊躇になる。

「まだ私の信仰は…」

なんて、自分の信仰を私して自分のものを考えて顧みている。大体のクリスチヤンがそうなんだ。「まだ私の信仰は…」もヘッタクレもない。

「信仰なんか棄てろ」

と言いたい。キリストに圧倒されるだけです。

「信仰なんか何もありません。キリストの力、光、生命に圧倒されて生きています」というわけです。圧倒というのは面白い言葉だな。倒される。上から抑圧されてひっくり返る。ひっくり返されて生きている。パウロは正に圧倒されているんだ。聖靈に圧倒されて起き上がつた。

「我が目より鱗の如きもの落ちたり」と言う。

●全身で受けとれ

十字架と聖靈です。キリストの十字架の贖いを全身で受けとると、そして祈り入ると聖靈がやつてくる。十字架の土台がなければダメですよ。我々のために生命を棄てて、自我、というものをすつ飛ばしてくださつたのが十字架ですから。我々の生まれつきの自我をすつ飛ばしたのが十字架の贖罪ということ。「罪」というのは「自我」ですから。罪といふのは、何か悪い事をしたり悪いことを思つたりすることを罪だと思うけれども、そうではない。自我心が罪なんです。それが十字架ですつ飛ばされてしまつた。

「もう、お前の自我心はみな私が贖つてしまつたから、自分なんか顧みる必要はない。い。ただ、来なさい。あるが今まで来なさい」と。そして、キリストの中に入つていく。無条件に入れる。今、自分の状態がどうだこうだなんてことは問題ではない。

「もう少し聖書の勉強をしてから。もう少し祈つてから」

なんていう、いろいろな条件はひとつも要らない。あるがまま、そのままキリストの中へ入つていく。

⁴⁷誠に誠に、なんじらに告ぐ、信する者は永遠の生命をもつ。



「受けとる者は永遠の生命をもつ」

ということです。「全身で受けとれ」ということ。あなた方は私の気持が分かるでしょ、なるほど一般に言われる「信ずる」という言葉はまだるつこくてしようがないということが。もし、信ずるという言葉を使いたければ、「信受」だね、信じ受けとる。しかし、やはり本当は信受よりも、全身で受けとる「体受」の方がいい。身体で受けとる。

「法華經を身体で読め」

と日蓮が言つた。さすがは日蓮だ。身読せよ、からだで読めと言つた。やはり、本ものの世界はそうなんだ。法然、親鸞、日蓮、そこらの坊さんは素晴らしい。一遍上人も凄い。一遍は捨聖ともいう。本当に棄身なんだ。

●『レ・ミニゼラブル』

私はヴィクトル・ユゴー（1802～1885）の『レ・ミニゼラブル』を読んだ。『レ・ミニゼラブル』はフランス文学の散文では最高のものだそうです。確かに素晴らしい内容です。もちろん前に読んだことがありますけれども、今度こうはん読んでもまた非常に感激しました。人生問題をあらゆる角度からとり扱つていて。非常に広汎にして深刻な内容です。

その序文に、

「法律と風習とによつて或る社会的処罰が存在し、それが人為的に文明社会の中に地獄をつくり、更に世間的不幸によつて神聖な人間の運命を紛糾させている限り、下層階級なるがゆえの男の失格、飢えによる女の墮落、日の目を見ないことによる子供の萎縮、それら三つの問題が解決されない限り、つまり或る方面において社会的窒息が生ずる可能性のある限り、言葉を代えて言えば、また広い見解をすれば、地上に無知と悲惨とがある限り、本書のよつた書物もおそらく無益ではないであろう。」

と謙遜に書いていますが、これは1862年の元日に書いた言葉です。私はまた新しく撃たれて読みました。これは是非、一遍お読みになるといい。

彼はいわゆる狭いキリスト教は嫌いなんだ。本当の人間のあるがままの世界を深くまた広く見ていた人だ。素晴らしいね、ユゴーという人は。ジャンバルジヤンは可哀相な人、弱い人を心からの本当の同情をもつて——単なる同情ではない——助けている。この中に出てくるゴゼットという非常に可憐な少女がいます。あの少女は素晴らしい。宿屋の悪い夫婦に虐待された。それをジャンバルジヤンが救い出してやつた。もともと彼自身は盜賊みたいなやつだつたけれども、それが大変な人に変えられた。『レ・ミニゼラブル』というのは素晴らしいね、フランス文学の最高だ。ドイツ文学でもあれにかなうのはないのでないかな。ヨーロッパの散文の文学では『レ・ミニゼラブル』が最高ではないかな。トルストイの『復活』もあれにはかなわないね。

